

一人と一人をつなぐ文学の授業

東京学芸大学附属小金井中学校教諭

数井千春

五月、まだ人間関係が不安定な一年生の教室で一編の物語を読んだ。同じ中学一年生の日常を描いた作品である。まずは作品を一読し、一人一人、自分が良いと思ったところを説明する短い文章を書いた。この作品を気に入った生徒ばかりでなく、「おもしろくない」ときっぱり言う子も「よくわからない話だ」と言う子もいる。確かに派手な展開はなく、主人公も格好いいタイプではない。結末もはっきりしない。「さまざまな感想があると思うけれど、何かしら良いところを見つけて説明してね。この人物は好き、この言葉の使い方は良いな、このせりふにぐつときた。心情の描き方で印象に残ったところ。この情景描写がすてきだ。テーマや主題について書くのもいいですね」。

自分が見つけた良さを説明する文章を全員が書き上げ、それを印刷して、みんなで

読み合った。自分は読み流した言葉に意外な良さを見いだす友人、気に留めなかった登場人物が好きだと熱く語る友人、さりげない表現に着目してテーマを読み取る友人。自分とは異なるさまざまな読み方に驚き、本文を読み返し、確かにそうだと納得しながら、物語を読み深めていった。一人で読んでもおもしろいけれど、みんなで読むともっとおもしろい。一つ一つの良さが積み重なり、作品全体の良さがじわじわと感じられる。そんな時間であった。

文学作品では一人一人が独自の発見をすることが出来る。教室にそれぞれの発見が集まると、不思議なことに、それを認め合い学び合う空気が自然と生まれてくる。テストの点数に表れるような優越感も劣等感も生じない。友達の読み方に感心したり共感したりしながら、みんなが作品の世界を味わう。教室にリラックスした穏やかな時

間が流れていく。生徒たちは作品について語りながら自分の価値観を語り、作品の良さに出会いながら友達の意外な一面に出会う。初めは「おもしろくない」と頬杖をついていた生徒も、友達の文章と本文に線を引いたり自分の考えを書き込んだりしながら読んでいた。

他者との関係のなかで自立的に読んでいくときに、子どもたちの読む力が育っていると感じる。一人で読み一人で考え、それを他者に向けて表現し共に考え、また一人で読む。他者に語ることにやりがいを感じ、他者と共に学ぶことに価値を見いだし、さらに自分の日々の生活につながっていくような授業、人と人がつながることによって自分の生き方を見つめるような文学の授業を、これからも目指していきたい。

生きる真実と出会う場

山口県美祢市立福中学校教諭 川口 寛

文学の授業さえなければどんなに楽しくと思わなかった国語教師はいないだろう。いつそハウツー本でネタを探そうか？

国語教師は今日も葛藤しつつ、あてどなさ、そろそろしき、畏れを胸に、教室に向かう。「高瀬舟」を一読後、教室の空気は一変する。重い何かを無理矢理に呑み込まされたような顔で、生徒はインクのしみから何を受け取っているのか。「お奉行様にきいてみたくてならなかった」羽田庄兵衛と同じまなざしで。その前でどんなノウハウが役に立とうか。ただ一つ、目を凝らし口を嚙み「言葉」に耳を澄ますことの他に。

文学とは特殊な一回性に生きる「人」による、安穩と生きる「私」への揺るがしと問いかけである。二度と回帰しない、二人として同じでない生きた「言葉」が、逆説的にそれぞれの「私」を結び付ける。

「少年の日の思い出」などではない、今も美と正義の間に喘ぐ心の疼きに寄り添

う。帰省こそ一番の「盆土産」なのに、さよなら代わりの「えんぴフライ」に笑った後、切なさきるとつぶやく。「メロス」を半ば馬鹿にし、半ば感動し照れる自分に赤面する。生徒は別世界に没入し、微かな違和に感心し、真正な問いかけに沈黙し、全生活経験をかけて応える。インクのしみは情感を湛えて受肉し、教室を揺るがす。国語教師は文学と生徒が切り結ぶ場となる「問い」を胸に、ここぞと発する瞬間をうかがう。

かくて「金持ちなのか貧乏なのか？」の問いは無意識の欺瞞を、「なぜ大じらしの説明を？」の対話が社会の桎梏を、「どき」と「どきつ」のたった一字の差異がわずかな残る「希望」のありようを浮き彫りにする。「故郷」を離れる語り手の臉の裏に浮かぶ「月下の道」は、もはや生徒にとって遠い世界の他人事でない。中学生という軌の下で今を生きる「私」それぞれの表象として、

確かな輪郭で照らし出されている。

もし独りでそんな言語体験が可能なら「文学の授業」などいらない。国語教師が与えられる偶像是何もない。生徒は頭でこしらえられた万遍ない正解など求めていない。生きる真実との出会いを求めている。

文学こそ実学である。個々の「私」が現実ここに生きる真剣勝負。魂とのやりとり。一期一会の「場」。国語教師はおしゃべり人形を造りたいのではない。真率な「言葉」に揺さぶられ、言葉の奥に「人」を感じ、共に生きる「私」を育てたい、その微かな「希望」——否。大いなる「志」を胸底に、今日も国語教師は文学を授業する教室への「道」を歩んでゆく。独りでないと信じて。



日常生活に生きる読みを

愛知県春日井市立尾東中学校教諭 白木 圭

私が文学の授業で目ざしているのは、文学的な文章（ここでは特に小説を念頭に置いている）の読み方を子どもたちに身につけさせることである。説明的な文章と同様に、文学にも基本的な読み方があると私は考える。そして、その型を身につけることができる、文学をより深く、豊かに読むことができると考えている。

ここで私が言っている文学の読み方とは特別なことではない。簡単に言えば、教科書巻末折込の「文学的な文章を読むために」に挙げられている観点、「語り手」「構成」「場面」「登場人物の設定」「登場人物の心情」について意識しながら作品を読み、一つ一つ丁寧に捉えていくことである。ただし、授業で教える際には、それらの観点を意識して読んだことで、「文学の読みが変わった」「新しいものが見えてきた」と子どもたちが実感できなければならぬ。そのため、説明や発問のタイミングを考え

たり、文章の中から適切な箇所を探したり、子どもどうしで読みの交流をさせたり、短い物語の創作をさせたりするなど、さまざまな手立てを考えて取り入れている。

しかし、私が何より大切にしているのは、学習した基本的な読み方について振り返る時間を、文学の単元ごとにしつかり取ることである。そして、同じ読み方で、どの文学作品の読みも深められることを、子どもたちに実感させていくことである。これをしてしまうと、せっかく身につけた読み方が、特定の文学作品に対してしか通用しないものだと子どもたちが思ってしまう、その後の読書生活を豊かにすることにつながるようになってしまうからだ。

桑原武夫は『文学入門』（岩波書店）の中で次のように言っている。

「人生はあくまで合理的に生きられねばならないが、人生を充実した、よりよきものとするためには、理性と知識のみでは足り

他者との討論で読む

北海道小樽市立向陽中学校教諭 山本雅博

勇氣、挑戦する心、夢を描くこと、諦めない心、多様な考えの他者と共に生きていく力。その土台をつくるのが文学の授業だ。文学は生活で利益につながらない、それは短絡的だ。文学の授業で学んだ思考力、培った感性や情緒、心の強さが人生の基礎力となるのだ。物語の基本型は「ゆきてかえりし」だ。人生一度だが、読んだだけそれを追体験できる。

授業は音読指導から始める。全員が、声に出してすらすら読めるようにする。

次に設定を扱う。登場人物・場所・時間など。設定を問うだけでアクティブ・ラーニングの授業、討論の授業になる教材もある。例えば、二年「字のない葉書」（向田邦子）の授業。発問「一つのお話ですか」。指示1「ノートに書きなさい」。指示2「お隣と話し合いなさい」。続けて、教室全体で発表し合う。意見が一つではないと、生徒はわかる。私は、教師が指名をせず生徒が

次々に立つて発表する「指名なし発表」の方法を四月から続ける。生徒に、主体的に授業に関わらせたいからだ。

場所を問う発問、人物の関係図作成によって討論を重ねていく。その後、発問「中心人物は誰ですか」。主発問である。「父」派「末の妹」派、「私」派に分かれる。「私」派がない年もある。中心人物の検討をしつつ主題に迫る。

討論の前には指導の工夫が必要だ。生徒全員のノートを見て丸を付ける。これは、自分の考えと理由を書いたという丸だ。書けない生徒は前に集めて考えを引き出したうえで、「それを書けば良いのですよ」と言って、ノートに書かせる。討論も、教師が指名しない「指名なし討論」だ。生徒だけで討論を進められるようになるには、指導技術と教師の授業力を必要とする。

討論後、作品の主題について自分の考えを書かせる。授業では答えを一つに決めず、

オープンエンドにする。それぞれ考える主題は違って良い。大切なのは自分の考えをもち、言葉にできること。他の人に伝え、話し合えることだ。そこには、物語に描かれた人生の追体験がある。上記の発問でそれぞれ一時間の授業になる。

文学を読む視点（イメージ、登場人物、人物関係、作品の構成、事件、キーワード、題材、モチーフなど）を教え、討論する授業。それは、言葉にこたわって読み考える、創造的・論理的思考と、他者とのコミュニケーションの力の伸張が期待される。文学の授業は、行動の源となる感情、感性、情緒を磨く。今後ますます必要になるろう。

